

「念仏者の生き方」に学ぶ②

「門主さまが伝灯奉告法要初日に示された」親教「念仏者の生き方」の中に、私たちの具体的実践として「和顔愛語」「少欲知足」の言葉があります。今回は「少欲知足」について、前号に続き本願寺派総合研究所の満井秀城副所長に解説していただきます。

「他力」の実践 自らの功德積まず

「少欲知足」という言葉も、前号の「和顔愛語」と同じく『無量寿経』において、法蔵菩薩が修行される一段にありませぬ（註釈版聖典26頁）。この法蔵菩薩の行を、私たち衆生の側で語るときには「和顔愛語」と同様の注意、すなわち、その行為の出所への注意が必要となります。法蔵菩薩のご修行は、大乘仏教共通の実践行、すなわち六波羅蜜の内容となっており、あくまで自身において功德を積む自力行として説かれています。私たちの実践行が、自らの

功德を積む自力行のはずはなく、他力の実践行としての位置付けでなければなりません。

「少欲知足」の言葉の意味そのものは「欲を少なくして足るを知る」ということです。

「欲は苦の本」 原因は自己中心

七高僧の第一祖である龍樹菩薩の伝記には、龍樹菩薩の若い頃の過ちとして、そこから気付かれた大きな発見が記されています。龍樹菩薩は、自分の姿が見えなくなる隠身の術を全得し、悪友たちと王様の宮殿に忍び込み、悪事を繰り

少欲知足

しょうよくちそく

—たしなむ心—

返していました。最初はやりたい放題でしたが、ついに露見することとなり、悪友たちは全員斬り殺され、龍樹菩薩一人だけが何とか生き残ることができました。その時、龍樹菩薩は、人間としての「大発見」をするのです。それが、「欲は苦の本」という道理でした。

私たちは、自分の苦しみの原因を、常に外に見ようとしています。隣のおはさんはタチが悪い、会社の上司が口クでもない。政治が悪い、教育が悪い、社会が悪い……。

夏目漱石の小説『草枕』の冒頭にある有名な一節をご存じでしょうか。「習に働けば角が立つ。情に棹させば流される。（中略）兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高いと、安い所へ引き越したくなる」。自分の苦しみは周囲に原因があると思ってしまうのは、自己中心の発見です。私たちが越しても住みにくい」と続きます。

つまり、自分にとって都合がいいか悪いかという見方を持っている限り、どこに行っても自分にとって都合の悪い存在は必ず現れるもので、苦の原因は外にはなく、実は自己中心という内なる欲にあるという大発見でした。

「わかっちゃいるけどやめられない」私たち

原因がわかれば解決の方法を探ることが可能になります。原因のわからない病気は治療法を探ることができませんが、どんな難病でも原因がわかれば、治療も予防も考えることができます。

いま、私たちの苦の原因が、自らの欲にあることがわかりました。そうすると、まず思い浮かぶ解決方法は、「欲をなくせば苦もなくなる」という策です。単純明快で、子どもでもわかる理屈ですが、いざ実行するとどうなるか悩まされます。「難行道」と言われる所以で、「わかっちゃいるけどやめられない」のが私達です。

え/ひじ みえ

龍樹菩薩は、他に方法はないだろうかと探してくださった。欲は欲のまま、苦につながらない方法はないかと考えてくださったので

筆者
満井 秀城



そこで発見されたのが「他力易行」の念仏でした。念仏申す身になっても欲はなくなりません。私達も、念仏申しながら、欲がなくなつたという実感はありません。親鸞聖人が、「無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかりはらだち、そねみ、ねたむところおほくひまなへして、臨終の一念にいたるまで」と言われます。きえず、たえず（同前）「わたしたちの身には無明煩惱が満ちみちており、欲望も多く、怒りや腹立ちやそねみやねたみの心ばかりが絶え間なく起り、まさに命が終ろうとするそのときまで、止まることもなく、消えることもなく、絶えることもない」と述懐しておられる通りです。

私たちの欲望は、どんどん際限なく拡大していくものです。他人が「いものを持っていくのを見たら」私も欲しいなと思えますし、欲しかったものが手に入ったらそれで満足するかというと、また別のものが欲しいになります。

世の中が便利になればなるほど欲しいものは増える一方で、欲望は拡大し続けます。このように、私たちの欲望には際限がないので、いつまでも「欲して」足りないうえに、不平や不満の毎日を送ることになってしまいます。

感謝の心めぐまれ 慎む身へ変えられる

しかし、念仏者は、欲望の拡大には向かいません。阿彌陀さまから「ありがたい」「もったいな」という感謝の心をめぐまれ、慎む身へと変えられていくのです。それが、他力の法義としての「足るを知る」ことです。

蓮如上人は、「いころにまかせずたしなむ心は他力なり」（同前）と、自己の心にまかせず、心がけて努めるのは阿彌陀仏のほたらきによるのであると仰っています。他力信心の念仏者は、自らの欲望に振り回されず、「たしなむ心」をめぐめられるのです。

